わらべうた（2）

私は音楽教育の一環として、わらべうたを行っているのであるが、わらべうたは、そもそも遊ぶための歌である。遊ぶための歌に、教育を持ち込めば、遊びは興ざめとなる。

芸術は、一説では、遊びから始まる。その昔ピアノの先生は、子供の手を叩いたりして教えていた時代もあったが、現代の音楽教室では、遊びから導入している所がほとんどであろう。

西方音楽院（西方音楽館内）のわらべうたクラスでは、わらべうたでとことん遊び、遊び馴染んだわらべうたを、教育方面に用いている。まずは、思いきり遊ぶことが大切であり、傍から見れば、とても教育とは思えない状況が繰り広げられたりもする。遊びに夢中になれば、お行儀よく遊ぶ、という訳にもいかないだろう。子守歌や、遊びに向かない歌は、何度何度も歌って聞かせ、聞き覚えたころ教育方面に用いている。遊びつくし、聴き慣れたわらべうたは、まずは皆で斉唱できれいに歌い、その後２声に分かれて歌ったり、時に打楽器も加えて歌ったりしている。

次号では、わらべうたで純粋に遊ぶ、というところから述べていきたい。わらべうたは遊びの宝庫なのである。 ［ 中新井 紀子 ］

第９回 西方音楽祭
４つのメインコンサート

古の楽の音に（いにしえ） ［2024 年 3 月 21 日］

～廣海史帆ベートーヴェンヴァイオリンソナタ全曲演奏会第２回に寄せて～

令和６年 (2024)3 月 21 日は廣海史帆さんのベートーヴェンヴァイオリンソナタ全曲演奏会第 2 回。毎回伴奏者を変えるこのシリーズ、今回の伴奏者は七條恵子さんだ。

前半は A. ロンベルク (1767-1821) のヴァイオリンソナタ第 2 番と L.V. ベートーヴェン (1770-1827) のヴァイオリンソナタ第 4 番。同時代の作品の聴き比べ、貴重な経験だ。

第４番が終わるや、西方音楽館常連の T さんがすっくと立ち上がって温かい大きな拍手。聴き手の深い所に、音楽の喜び、ベートーヴェンの魅力を熱く届けてくださったお二人の演奏。聴き手は高揚する。その興奮を分かち合える喜び。これも、西方音楽館木洩れ陽ホールの演奏会の魅力だろう。

後半は、フォルテピアノのソロで F.J. ハイドンのカプリッチョ、そしてベートーヴェンの、巷間「スプリングソナタ」と言われる第５番。曲のたてつけの違いか、４番に比べるとおとなしい印象だった。

この演奏会から１週間余り後の３月 30 日、西方音楽館を訪れた矢澤孝樹さん（現在は山梨のニューロン製菓の社長さんだが、かつては水戸芸術館学芸員、レコード芸術等の CD 評でも高名）は、

　この場所では、今は無き「蔵の街音楽祭」の DNA が、たしかに受け継がれている。

と、facebook に投稿された。

古い時代の楽器フォルテピアノと、進境著しい廣海さんのバロック･ヴァイオリンのアンサンブル。古の楽の音（いにしえ）に新しい音楽を聴く喜び。栃木 [蔵の街] 音楽祭の DNA に違いない。

次回の伴奏者は川口成彦氏。こちらにも期待が高まる。 ［ 会員：髙田 良久 ］

七條恵子「2 つのピアノで巡るウィーン」［2024 年 3 月 30 日］

～スタインウェイとフォルテピアノの音色で探る旅路～

「グランドピアノは弾いて少し時間を置かないと音が出ず、内向的。フォルテピアノは反応が素早く、雄弁で外向的。同じウィーンの地だけれど、時代を隔てたウェーベルン、シェーンベルクとモーツァルトをそれぞれの楽器で聴いて、何か違いやつながりを感じたら、それを私に教えてほしい」――このようなお話を奏者の七條さんがなさり、演奏会は幕を明けた。いや、そもそも、表現力豊かだけれど扱いによっては、このホールでは音が鳴りすぎるとも言われる常設ニューヨーク・スタインウェイと、殊に音質の繊細なワルター 1795 年モデルのフォルテピアノ（こちらもホール常設）とを弾き分けるとは…？そして、音量の小さいはずのフォルテピアノの方が外向的とは…？そんな疑問に固まっていたが、七條さんは２つの楽器を全く同等の存在感で鳴らし、先の仮説を鮮やかに証明してくださった。確かに、一人でいて、心のうちに耳を澄ますと聞こえてくる音のようなウェーベルン、色彩は「灰色のグラデーション（奏者の言葉）」だ。目を閉じた後の世界。続くモーツァルトのソナタ 12 番は、まるでオペラのアリアのよう。そして極彩色の世界。本当にフォルテピアノの何と雄弁なことだろう。（恐らく、限られた弾き手にしか引き出せない音なのではないか。）この２台から発せられる音楽を素のまま対比できるなんて、もの凄い体験だと思う。

そしてまた、奏でられる作品の存在感の強さが圧倒的である。フォルテピアノからの音の引き出し方――大迫力の低音からきらびやかな高音まで――、メロディの歌わせ方、響きを聴いた絶妙な間等々、どれも本当に素晴らしいのだが、一つ一つの要素で立ち止まることを許さないほどに、作品が鮮やかに立ち上がってくる。幻想曲では、空間が歪んで見えるほど、この世ならぬ世界に引き込まれていくのを感じた。一体、モーツァルトにはどんな世界が見えていたのか、恐ろしいような思いである。

一つ一つの演奏が度肝を抜かれるほどに素晴らしいのに、さらにその先に、プログラムの中で、音の偏在と集約（無調音楽と調性音楽）、音楽が向かっていく方向の内外、など新しいアイディアが見通されている。本当に、頭がグラグラするほどに刺激的な演奏会であった。 ［ 会員：赤羽根 はるか ］

川口成彦ピアノリサイタル ［2024 年 4 月 7 日］

～ニューヨークスタインウェイ B で奏でる、スペインの珠玉の作品、そしてショパン～

私が川口さんの演奏に初めて触れたのは西方音楽館の第 87 回コンサート。爾来欠かさず参加しています。「ニューヨークスタインウェイ B で奏でる、スペインの珠玉の作品､そしてショパン」と題した今回のコンサートは､意表をつくシューマンのアラベスクで幕が開かれました。配布されたプログラムには手書きで記載されていました。その後、川口さんからショパンと彼の仲間達をスタインウエイで紹介するとのアナウンスがありました。まず、弟子三人の曲、弟子二人の曲、最後にショパン。それぞれのお弟子さん達とショパンの関係のご説明がありましたが、中でもショパンのお手伝いさんとして知られたというフォンタナは、ショパンから「死後には 焼却せよ」と指示されていた未出版の楽譜を出版し、その中には幻想即興曲が含まれていたとのこと。フォンタナの功績は偉大ですねえ。

５人の弟子達の曲は何れも「ショパンの作品だろうなあ」と思ってしまうようなショパンらしい響きの曲で美し かったです。前半の最後の曲は幻想ポロネーズ。ショパンはバロック音楽に精通していたとのことで､川口さんは幻想ポロネーズの最後の部分はバロックの組曲の最終楽章と同様にジーグで、これは人生が終盤に差しかかっていたことを暗示していたのではないかとおっしゃる。深い！

休憩を挟んだ後は、川口さんが入れ込んでおられるスペインの作曲家の曲。アンコールはカルクブレンナーというドイツ人だがパリの音楽界の重鎮であった人の曲。これも…なんとなくショパン調かなあ。

川口さんのコンサートは、軽快で曲の裏側をさらりと流されるお話、澄んだ音、切れ味のよい演奏で、いつも幸せな気持ちに満たされて会場をさることになります。今回は、会場の椿が満開。また、珈琲を愉しめるテーブルには黄色と白の水仙が 飾られていて、音楽とともにわたしの心を癒やして頂けました。 ［ 会員：谷 伸 ］

国際古楽コンクール＜山梨＞入賞記念コンサート［2024 年 4 月 13 日］

ソプラノとチェンバロとフォルテピアノで贈る 17 ～ 19 世紀の音楽

ソプラノ：櫻井 愛子
チェンバロ＆フォルテピアノ：加藤 美季

櫻井愛子さんは、昨年の最高位、加藤美季さんは、一昨年の最高位、お２人ともかなりの実力をお持ちであることが、ありありと分かるコンサートでした。櫻井さんは、バロック初期からロマン派まで、様式の違いを的確に捉え、やや太くしっかりとした響きの美しい声で、見事に歌い切りました。今後のご活躍がますます楽しみなソプラノ歌手です。加藤さんは、J.B. バッハ以前までのプログラム前半はチェンバロで通奏低音とソロ、モーツァルト以降は、フォルテピアノで伴奏とソロ、これまた見事に弾き切りました。加藤さんは昨年の西方音楽祭での演奏より、一段と腕を上げていらっしゃる。

当日のプログラムも、よく考えられていて、関係性のある歌数曲の後、実に良いタイミングで、チェンバロ・ソロやフォルテピアノ・ソロが入る。最後まで、興味津々に聴き入りました。

国際古楽コンクール＜山梨＞入賞記念コンサートに出演なさる、最高位の方々は、毎年、非常に質の高いコンサートをなさいます。しかしながら、まだ、ファンが付いていなかったり等で、集客にはいつも苦労します。絶対、お薦めのコンサートですので、ぜひ、聴きにいらしてください。 ［ 会員：中新井 紀子 ］